埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

初等教員養成に必要とされる音楽経験に関する一考察：模擬授業の有効性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤, 江里 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/217

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

初等教員養成に必要とされる音楽経験に関する一考察

── 模擬授業の有効性 ──

安　藤　江　里

1. はじめに

初等教員養成課程における教科教育法や実技演習の授業を通して，一般学生が身に付けるべき音楽の基礎知識と技能及び授業づくりの学びに関する課題は非常に多いと思われる。全体として音楽の経験不足は否めず，将来教員としての授業づくりや実践に影響を及ぼすことは必至であると思われる。では，初等教員養成においてどのような音楽経験が必要だろうか。筆者は実技を中心とした演習と教科教育法の講義との相互的な実践研究によって，初等教員に必要とされる学生自身の音楽の基礎力と授業実践力育成に必要な音楽経験を次のように考える。

① 聴　く　力……音楽を形づくっている要素を理解し感じる，知覚・感受力を養う経験
　　音色や曲想などからイメージを深める音楽的な感受を促す経験
② 表　現　力……歌ったり，演奏したり，身体の動きによって表現を工夫する経験
　　感じたことやイメージを言葉や絵などでも表現し伝える経験
③ 創　造　力……模倣から替え歌など応用して創りかえたり，様々な要素の組合せや楽曲構成を考えてアレンジし，新しい音楽を生成する経験
④ 授業実践力……小学校学習指導要領に提示されている音楽科の目標及び内容の理解とともに具体的な指導法や展開事例を模擬的に経験した上で，学生自身が指導案の作成・模擬授業の実践・評価するという一連の音楽経験

本研究の目的は，初等教員養成に必要な音楽経験の中でも，④授業実践力育成における模擬授業による音楽経験の有効性を明らかにするとともに，新たな可能性と課題を見出し，考察することである。

2. 研究の方法

平成 24 年度及び平成 25 年度に実施した「初等音楽科教育法」の講義における，模擬授業について分析・考察する。講義の概要は，初年度の経験から次年度は多少の変更を加えたが，基本的には，小学校学習指導要領解説にある各学年の目標及び内容の系統表に沿って，低（第 1 学年及び第 2 学年）・中（第 3 学年及び第 4 学年）・高（第 5 学年及び第 6 学年）の学年別にそれぞれ領域 A「表現（歌唱・器楽・音楽づくり）」B「鑑賞」の内容及び共通事項からキーワード(1) を抜き出し，総合的な学習を含めて具体的な指導実践例を提示していく。ただし，音楽づくりと鑑賞の指導および総合的な学習に関しては，時間の関係からそれぞれ 1 回ずつ全学年をまとめて行った。

次にグループ活動として指導案を作成した。グループ構成は学生に任せ 5〜6 人程度とし，各グループで相談しながら，題材名，目標，対象学年，指導内容，教材について，指導計画，評価規準を設定し，模擬授業を実践する本時の展開を詳細に決めていった。1 時限（90 分）の中で完成するのは難しく，グループによっては役割分担をしつつ，模擬授業実践のための具体的な楽曲教材の音源準備や，ワークシート，リズムカードなどの印刷準備は各自で時間外に行った。

模擬授業の実施は 3 時限行い，1 時限に 3〜4 グループ，各グループ 20 分程度の実施となった。そして自分のグループの模擬授業のふり返りと他のグループの模擬授業の評価，及び最終レポートの記述を分析，考察していく。

3. 学生の実態

受講生は教育学部の 3 年生を中心とする，24 年度 50 名，25 年度 52 名であり，附属校での実習を終えている。また学生は，英語，情報教育，国際教育，学校心理，保健体育などの選修分野を持っている。初回に音楽経験などに関するアンケートを実施した。質問事項は次の通りである。

1. 音楽歴の有無について（合唱や吹奏楽などの部活動や習い事）
2. 高校での音楽科の履修の有無　1 年次　2 年次　3 年次
3. 小学校の教育実習における音楽科の授業について（見学内容，実践内容）
4. 自分の小学校時代の音楽の授業で印象に残っていること
5. 初等音楽科教育法で学びたいこと

アンケートの結果は以下の通りである。

表 1　受講前の学生の音楽経験に関するアンケートより

質　問　事　項	24 年度	25 年度
合唱や吹奏楽などの部活動や習い事の経験あり	65%	60%
授業以外で楽器などの音楽経験なし	35%	40%
高校での音楽科の履修なし	50%	39%
1 年次のみ履修	20%	42%
2 年次まで履修	20%	17%
3 年次まで履修	10%	2%
実習中の音楽科授業　見学のみ	98%	100%
授業実践	2%	0%

小学校，中学校，高等学校での授業以外に部活や習い事，趣味などで音楽経験のある学生は全く無い学生を上まってはいるが，個別に見るとその具体的内容はかなりの幅があり，幼いころにピアノを習っていても現在は伴奏を苦なく弾けるわけでもなく，教師として持つべき音楽の基礎力は不十分な学生がほとんどである。高等学校での履修状況からも，いかに音楽に触れる機会が少ないかがわかり，知識の再認識と様々な音楽経験が必要と思われる。

教育実習の見学の内容は，附属校の時期的な都合もあり，ほとんどの学生が，「歌や合唱」，「合奏」を主な活動として挙げており，低学年に配属された学生からは「リズム遊び」や「身体表現」「音楽劇の練習」などの記述も見られた。また学生自身の小学校での音楽科の授業で印象に残っている経験を問うと，発表会に向けた「合唱や合奏」の活動が中心を占め，「鑑賞」や「音楽づくり」に言及している学生は少数であった。

一方，「初等音楽科教育法」で学びたいこととして，各学年の指導内容，指導法，教材選び，授業の構成，子どもが楽しめる活動，音楽を通して育てたいもの，苦手な子への対応，他の教科との違い　などの記述があり，教育に携わろうとする学生として非常に意欲的なものであった。

以上のことから，受講前の学生の実態として，半数以上の学生は音楽の基本的な知識や音楽経験が乏しいため，音楽科の授業のイメージが「合唱や合奏」という活動に偏りがちに思われるが，具体的な指導実践例を示しながら経験することで，様々な指導内容や指導法を知り，自らが授業を構築し実践する力を身に付けることが必要と考えた。

4. 講義の具体的内容

15 回の講義の具体的内容は以下の通りである（25 年度変更，追加したものを含む）。

表 2　講義内容

回	講　義　内　容	主な楽曲教材 （教科書　DVD 映像　その他）(2)	キーワード
1	オリエンテーション 音楽科の目標・内容について	サウンドエデュケーション さんぽ	音　感性　情緒 遊びから学びへ
2	低学年の歌唱指導 わらべ歌と遊び歌	ひらいたひらいた・もちつき・なべなべそこぬけ・スイカの名産地・こぶたぬきつねこ・春がきた	拍節感　身体表現 言葉遊び　輪唱
3	低学年の器楽指導 リズム打楽器と鍵盤ハーモニカ	かえるのがっしょう・アイアイ・いるかはザンブラコ・おもちゃのきかんしゃ・みんなでコンサート	拍子（2 拍子と 3 拍子） 旋律（階名）　音高　音色
4	中学年の歌唱指導 ボディーパーカッション	春の小川・もみじ・ドレミのうた・とんび・スタージョグ	旋律の特徴　強弱　ハ長調 音の重なり　リズム表現
5	中学年の器楽指導 リコーダーとオルフ楽器	笛星人・冬の空・かごめかごめ・オーラリー・もののけ姫・茶色のこびん・八木節	反復　問いと答え　即興 音の重なり
6	高学年の歌唱指導 ハーモニー	ふるさと・故郷の人・ちいさい秋みつけた・HEIWA の鐘・君をのせて	発声　ハーモニー　イ短調 表現の工夫
7	高学年の器楽指導 ハンドベルとトーンチャイム	きよしこのよる・星に願いを・木星・モルダウ	ハーモニーの響き　縦と横の関係
8	鑑賞の指導	おどる子ねこ・卵の殻をつけたひよこのおどり・山の魔王の宮殿にて・ボレロ・天国と地獄・ユーモレスク・動物の謝肉祭より水族館	曲想の感受　楽曲の仕組み 反復と変化　速度　身体・図形表現
9	音楽づくりの指導	わらべうたのかえうた　いろはにこんぺいとう　リコーダーのふしづくり　山のごちそう　お囃子の旋律とリズム創作 いろいろな音階からの旋律づくり	かえ歌　意図を持った創作 模倣　即興　手作り楽器
10	総合的な学習について 1 年生の音楽劇の観賞	絵　物語　劇　身体などによる総合舞台芸術　お祭りや運動会などの行事と音楽科の関わり	世界の音楽　日本の音楽
11	指導案作成	グループ活動	
12 〜 14	模擬授業実施	グループごと模擬授業を実施（1 グループ 20 分程度）	
15	評価・まとめ	各グループの感想・評価等　レポート提出	

5. 学生の指導案における題材名及び指導内容一覧

表 3　24 年度 12 グループ　班員の選修分野[3]

班	題　材　名 （楽曲教材・提示資料など）	年	主な活動の展開	キーワード
A 情	身近なものを使って音を表現しよう （みんなでコンサート）	2	「ブンチャッチャー」の部分を身体で表現→様々な楽器を使って→歌詞を替えてみる	身体表現　リズム表現 音楽づくり
B 情	リズム遊びをしよう （いるかはザンブラコ　行進曲 CD）	2	2 拍子と 3 拍子の曲を聴き，違いに気づかせる→3 拍子を身体で表現→創作へ	比較聴取　拍子 身体表現　創作
C 情	曲を感じ取り合奏しよう （木星　写真・CD・ワークシート）	6	「火星」と「木星」を聞かせ，イメージの比較→「木星」の合奏へ	鑑賞　曲想の感受　表現の工夫
D 英	体をつかってリズムにのって歌おう （山のごちそう　英語版）	3	歌詞の内容に出てくるものを擬音語と動作で表現する	言葉のリズム感 身体表現
E 際	ドレミの歌を感じよう （ドレミのうた）	1	「ドレミのうた」を歌う→ドレミ…の音階を身体で表現→歌いながら動作を付ける	音階　音高　身体表現
F 国	学芸会に向けて （夏の日の贈り物）	6	学芸会の劇「ユタと不思議な仲間たち」の合唱として設定し，イメージを持つ→二部合唱の指導	物語からのイメージ 声を合わせる
G 情	がっきらんどのたんけん （おもちゃのきかんしゃ　パワーポイントによる資料）	1	「ぴーぽーぽー」→ミファソ　「ぴーぷーぷー」→ミレドに変えて歌う→鍵盤ハーモニカで演奏→歌と鍵盤ハーモニカのグループに分かれて合奏	音階　音高　歌と楽器
H 書 幼	イメージを広げて表現しよう （豆まき　絵本・歌詞カード）	1	「節分」の行事についての話や絵本からイメージを持つ→「豆まき」の歌→「ぱらぱら」の部分に合う楽器や動作を考える。	総合的な学習 表現の工夫
I 体	どんなリズムでなんのおと （虫のこえ）	2	「虫のこえ」を歌う→虫の泣き声「リンリン　チンチロ…」のリズムを手拍子→簡易打楽器で表現→楽器の音色の違いを楽しむ	リズム表現 楽器の音色
J 際	世界の音楽を聴いて曲名をつけよう （CD・写真・ワークシート）	5	イギリス・スペイン・日本・アメリカの音楽を聴き，曲想からイメージを持ち曲名を考え発表→それぞれの民族性や歴史的背景の説明	鑑賞　曲想の感受 総合的な学習

K 情	こぶたぬきつねこ （こぶたぬきつねこ　ワークシート）	2	「こぶたぬきつねこ」を歌い，かえうたを考える→言葉とそれに対する音を楽器や身近な物で表現	言葉と音の創作
L 英	かえるのうたがきこえてくるよ （かえるの合唱）	1	「かえるの合唱」を歌う→「クワークワー　ケロケロ…」の泣き声を楽器や身近な物で表現	音のイメージ　創作

表 4　25 年度 10 グループ　班員の選修分野[3]

班	題　材　名 （楽曲教材・提示資料など）	年	主な活動の展開	キーワード
M 心	音楽家になろう　ギター伴奏 （山のおんがくか　ワークシート）	1	「山のおんがくか」から替え歌を考え，歌詞のイメージに合う音を身近な物で探す	音楽づくり 音色のイメージ
N 心	からだとリズムで楽しもう （茶色のこびん ワークシート）	4	旋律に重ねるリズムパターンの提示→手拍子からボディーパーカッションを考える→グループ発表	リズムの身体表現 音楽づくり
O 心	音をつくってかなでよう （虫のこえ　写真）	2	「虫のこえ」に出てくる虫の写真と実際の鳴き声を提示→鳴き声の音のイメージに合う楽器を探す→グループで発表会	楽器の音色 音探究
P 情	いろいろな行進曲をきいてみよう （トルコ行進曲　ラデッキー行進曲　結婚行進曲 CD　ワークシート）	3	3 曲の行進曲を比較聴取し，イメージ，速さ，強弱，楽器編成の違いなどに気づく→それぞれのイメージを身振りで表現する	比較聴取　知覚・感受 身体表現
Q 情	ヴォイスアンサンブルを楽しもう （野菜の気持ち）	6	様々な野菜の名前と絵を提示し，言葉のリズムを味わう→グループで好きなものを組み合わせてオリジナルの「○○○の気持ち」を創り，発表する	言葉とリズム 音楽づくり
R 情	リズムをつなごう （さんぽ　タブレット動画）	2	歌に合わせて手拍子をする→グループで手拍子をリレーしていく→動画を提示→渡すタイミングについて考える	リズム　拍子感
S 情	1 年生をむかえよう （きみたち今日から友だちだ CD）	1	CD を聴き，提示された歌詞を理解し，イメージを持つ→表現を工夫して歌う	歌詞の理解とイメージ 表現の工夫
T 幼	ドレミであそぼう （ドレミのうた）	1	「ドレミのうた」を歌ってから，階名唱をする→音階の高低を身体を使って知覚し，表現する	音階　音の高低 身体表現

U 心	リズムであそぼう （ぶんぶんぶん）	1	旋律をリズム唱（タンタンタンウン　タタタタ…）→四分音符，四分休符，八分音符のリズム譜で手拍子→一拍分のリズムカードを組み合わせ，自分のオリジナルを創り発表する	リズム譜の理解 音楽づくり
V 学 特 社	リズムを組み合わせてあそぼう （リズムカード）	2	「お祭り」のイメージでリズムパターンとかけ声を 6 種類提示（ドンカカ　ワッショイ　みこしだ　ドドン……）→グループで自由に組み合わせて，オリジナルのお祭りのかけ声を創り発表する→楽器を取り入れてもよい	言葉とリズム 音楽づくり 総合的な学習

6. 指導案及び模擬授業の分析と考察

⑴ 指導案設定の分析

全 22 グループの指導案における対象学年の設定と主な指導内容を領域別に分類すると表 5 のようになっている[(4)]。

表 5　対象学年の設定と主な指導内容の領域（グループ数）

対象学年		24 年度	25 年度	計		歌唱	器楽	音楽づくり	鑑賞	総合的
低	1 年	4	4	8	15 68%	3	1	3	0	1
	2 年	4	3	7		0	1	6	0	0
中	3 年	1	1	2	3 14%	1	0	0	1	0
	4 年	0	1	1		0	0	1	0	0
高	5 年	1	0	1	4 18%	0	0	0	1	0
	6 年	2	1	3		0	0	1	1	1
計		12	10	22		4	2	11	3	2

①　対象学年について

半数以上のグループが低学年を対象とした指導案を作成している。このことは一般学生にとって実際小学校教諭の場合，低学年の音楽科の授業を実施する可能性が高いことや，指導内容についても比較的単純な遊びの要素を含み楽しく分かりやすい内容であったためと推測できる。中学年，高学年を対象にした授業は，音の重なりやハーモニーなどより音楽的に高度な技能と感性による指導力が要求されてくるためなかなか挑戦するグループは少なかったと推測する。

② 主な指導内容の領域について

表5の分類を分析すると，音楽づくりが半数を占めていることがわかる。低学年の場合，比較的簡単なリズム遊びや身体表現を創作したり，替え歌や言葉の持つリズム感やイメージから楽器や身近な物の音を探したり，音遊びの要素が多く含まれていた。また歌唱や器楽の学習と関連付けながら音楽づくりの活動へ展開していくものも多く，工夫が見られた。

中学年以上における，とりわけ4年生以上において，歌唱や器楽を指導内容としたグループは無いが，代わって鑑賞や総合的な学習としての設定だった。高学年においては知的に高度になり視野も広がるため様々な事象のイメージを持たせる事が可能であり，設定しやすかったと分析する。

③ 講義内容との関連性について

表3および表4の楽曲教材を分析すると，講義で提示した楽曲教材や映像資料を活用したグループは24年度は8グループ，25年度は5グループであった。特に低学年の表現に関する指導では，幼小連携の観点も含めわらべ歌や遊び歌など子どもの生活の中にある身近な素材を大事に，身体表現など楽しめる活動を取り上げる趣旨が大いに反映されたと考える。

中学年の表現の指導では，音の重なりや問いと答え・反復など音楽のしくみに，また高学年の表現の指導では調性やハーモニーに主眼を置いて指導実践例を示したが，今回の模擬授業には反映されなかった。このことは，前述したように音楽的にも一歩踏み込んだ内容であり，音楽経験としては実感あるものの実際指導者の立場に立って授業を行うには専門外の学生にとっては少々難しいのかもしれない。

鑑賞の指導では，24年度は楽曲からの感受と音楽のしくみを知ることを中心に選曲したが，時間の関係から「聴いて感想を書く」という経験にとどまった。学生からも，もっと様々な指導法提示が望まれたため，25年度はよりわかりやすい要素の比較聴取や聴いた音楽のイメージを身体表現につなげるビデオ，絵（図形）で表現する活動も紹介し，学生自身のイメージも深まるような音楽的感受を促す活動を取り入れた。Pグループは行進曲の比較聴取を取り入れ，それぞれのイメージを身振りや言葉や絵で表現する活動を取り入れていた。

音楽づくりの指導については第9回の講義のみならず，各学年の表現領域の指導の中でも随時展開例として触れていった。音楽づくりの活動は多様であり実際経験してみないとわかりにくいが，部分的替え歌や要素の変化，重なりの組合せなどによって様々なアレンジの可能性を経験できた。「合唱や合奏」といった音楽科の授業のイメージが強かった学生が，実際の模擬授業においては音楽づくりの活動を多く取り入れ，子どもたちが作り変えていく楽しさや自分たちで創ったものを表現する喜びを持つような工夫を取り入れていたことは，講義での経験と学生の柔軟な

教材応用力や開発力によると思われる。

④　選修分野との関係について

各グループの学生には様々な選修分野があり，それらと関連付けたり生かしたと思われる指導内容や教材が見られた。例えば，英語科のＤグループは講義で扱った「山のごちそう」の英語版を歌唱教材として用い，歌詞の内容を擬音語と動作で表現し，言葉の音声感や抑揚の表現は英語教育と音楽教育とつながる部分があった。情報科のＧグループはパワーポイントによる鍵盤ハーモニカの画像を作成して，子どもの興味を引き付ける教材提示を取り入れた。同じく情報科のＲグループは子どもがiPadを活用して動画を参考に自分たちの表現を考える活動を取り入れた。さらに国際教育のＪグループは世界の様々な音楽を鑑賞で扱ったり，体育科の学生を含むＥグループでは主に音階の高低を身体で大胆に表現する活動を取り入れたり，国語科のＦグループは学芸会の音楽劇として物語のイメージを持ちながら歌の表現を作り上げていった。それぞれの選修分野の特徴を生かし，総合的な学習や合科的な手法を取り入れたり，教材提示の方法として活用するなどの工夫が見られたことは新たな発見であった。

⑵　模擬授業の評価

模擬授業の実践は各グループ20分の時間制限があるため，簡単に設定を説明した上で，学生はそれぞれ代表の教師役と児童役になりきり，場合によっては指導案に固執せず臨機応変なやり取りの中で，お互い理解し協力し合いながら進めていく姿がみられた。学生には模擬授業後に自分のグループのふり返りと，他の各グループの評価シートを記入してもらった。

自分のグループのふり返りについては，レポートからの考察と絡めて後述する。ここでは他のグループの評価項目別に自由記述を参考に総括する。

表6　模擬授業の評価

<table>
<tr><td>班</td><td colspan="5">題　材　名</td><td>対象学年</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="5"></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">主な指導内容</td><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">評　価

Ａ Ｂ Ｃ</td><td>対象学年に合っているか</td><td>授業全体の構成はどうか</td><td>主な指導内容は伝わったか</td><td>教師の指導力
（話し方　技術面）</td><td>教材・音響
環境設定等</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">感想　良い点
改善点　など</td><td colspan="5"></td></tr>
</table>

① 対象学年について

指導内容とも関係するが，各グループが考えた題材や楽曲教材に対し，対象学年はおおむね適合していた。学年といってもそれまでの学習の流れや状況によって様々であり，学生のとらえ方も様々である。たとえば，E・T グループは共に「ドレミのうた」を 1 学年で扱い，音高を身体で表現するという主旨だが，ド〜ドの 1 オクターブの音階は 1 年生にとっては多くて難しいのではないか，という意見があった。一方音階の理解というより，音の高低を身体で表現することで興味を持ち楽しさを味わいながら，次第に階名に慣れていくのでは，という意見もある。実際学生は教育実習を経験してはいるものの，配属された学年以外はそれほど明確に子どもの発達段階を把握できているわけでもない。しかし教師の視点として，対象児童の発達段階に適した題材と指導内容を考慮することは当然重要であり，常に考えていかなければならない。

② 授業構成について

今回の模擬授業では時間的な制限のため，指導案を全て実践することはできず，導入が簡単な説明だけであったり，主な活動が長くなりまとめが不十分であったりした。そのため授業全体の構成までとらえるのは難しかったと思われるが，主な活動の流れがスムーズに行われていたか，子どもにとって分かりやすかったか，について評価を試みた。事前準備をしっかり行っていたグループと不十分なグループの差は顕著であった。

③ 指導内容について

表 4 に示したように，主な指導内容は模擬授業においておおむね実践された。今回は低学年を中心に楽曲教材の旋律やリズムを楽しく身体や楽器で表現することに加え，イメージの音を探したり音楽づくりへつなげるなどの工夫が取り入れられ，音楽科の指導内容の方向性としてはとらえていたと思われる。中学年以上においては，鑑賞の指導は可能であるが，表現領域に関しては一般学生にとっては難しく，実践したグループが少なかったことは残念であった。より音楽的に踏み込んだ指導内容を実践できるような経験が必要であろう。

④ 指導力について

学生はすでに教育実習を経験していることもあり，模擬授業の評価も比較的シビアで，話し方，発問の仕方，授業の進め方に対して色々な意見が出た。「もっと子供からの発想を引き出した方が良い」「つい教師が持っているイメージを口走ってしまう」などの指摘も見られ，より子どもを主体とした授業観を持っている学生の記述が多い。また「今のすてきだったね」「それもいいね」など予定されてない子どもからの発言に対しての言葉がけも肯定的なものが多く，何より緊

張や不慣れな中でも教師が楽しそうに授業している姿が印象的であった。

また，楽曲教材の旋律を範唱，範奏したり伴奏をピアノやギターで演奏した班とCDや他の媒体による音源を使った班があった。練習する準備時間がなかったり，今までの音楽経験を鑑みれば致し方ないが，楽器演奏が苦手な学生も歌ったりリズムを打ったり身体表現であれば楽しく子どもと一緒に活動することができ指導力を発揮できることがわかった。簡易リズム楽器でも触れたことのない楽器は音の出し方もよくわからないので，和楽器も含め様々な楽器に触れる経験を積むことで，自信を持ち壁が取れていくと思われる。そして学生自身がそれぞれの楽器の良さを表現する喜びを味わう経験が必要であり，その経験が授業実践においても役立つであろう。

更に今回の模擬授業では表現領域の実技指導が少なかったために実践されなかったが，実際は学習発表会や行事などでの合唱や合奏の指揮法の習得も必要であろうし，読譜力も求められよう。専門的ではなくとも低学年の指導に必要最低限の音楽的指導力としての課題は残る。

⑤　教材，音響，環境設定等について

学生が作成し提示した教材は，主に歌詞カード，リズムカード，絵本や写真，ワークシート，iPadの動画やパワーポイントによる資料であり，板書もしていた。これらについても，「もっと大きい字の方がよい」とか「絵が工夫されていた」等の記述があった。教室環境は大学の講義室のため人数に対しては狭く，立つ座る等の行動が制限されてしまったり，音が聞こえにくくなったりした。また持ち込める楽器も制限されていたが，限られた環境の中で，学生はできるだけ臨機応変に対処し工夫を凝らしながら行っていた。

⑶　レポートからの考察

講義と模擬授業による音楽経験を通して，ほとんどの学生が「楽しかった，参考になった」と肯定的なコメントをしている。自分のグループのふり返りと他グループからの学びについて，レポートから模擬授業の有効性を考察する。

①　自分のグループのふり返り

音楽科の授業について考え指導案を書くことも初めての経験であり，模擬授業の実践もグループで協力しながらの活動だが，悪戦苦闘した感想が多い。反省点としては，「時間が足りなかった」「対象学年に対して指導内容の量が多すぎた」「難しすぎなかったか」「準備不足，説明不足だった」などが挙げられている。また「今回の模擬授業は大学生だから比較的スムーズに進んだが，実際は子どもが対象であり，もっときめ細かい準備が必要である」と現場を想定して指摘する学生も多かった。周知のとおり，あくまで学生どおしの模擬授業体験であり，グループ活動と

して扱っているが，実際は一人で計画を立て，児童の実態に沿って授業を構成し展開していく現実とは違ってくるであろう。しかしながら，音楽経験の少ない学生がまずはグループディスカッションしながら，ねらいに沿った指導内容をどんな教材でどのように指導したらよいか考慮して授業を構築し，実践してみる経験は必要であり，その経験から様々な課題について考え，次の段階として実際の現場を想定した計画を練ることは大いに有効と考える。そして苦労しつつもやりがいを感じている学生が多く，実際に模擬授業を実践してみて，課題は残るが音楽科の授業が思っていたよりも楽しみながらできた，という感想が多かった。実習でもなかなか音楽科の授業を実践しようとする学生は少ないが，自分にもできそう，という肯定的な感想が持てたことは大いに喜ばしいことであり，有効な音楽経験であった。

② 他のグループからの学び

自分以外のグループの模擬授業を体験し，前述の模擬授業の評価シート（表 6）を通して様々な課題論点が挙がったが，多くの学びもあった。「音楽の授業がこれほどバラエティーのあるものとは知らなかった」「様々な授業スタイルを知った」「同じ楽曲教材でも色々な扱い方があることを知った」などの感想が多かった。学生自身の経験からは，漠然と楽曲を「歌う」「演奏する」「聴く」という活動そのものでしかなかった音楽科の授業が，そこに含まれているねらいや指導内容をふまえ具体的な模擬授業の中での音楽経験により，工夫次第で様々な学習につながる可能性があることを実感できたのである。

特に低学年を中心として，幼小連携の視点，総合的な学習や合科的な学習への視点を含む模擬授業を実践した H グループの「イメージを広げて表現しよう」や V グループの「リズムを組み合わせてあそぼう」に関する記述から，他の学生にとって有益な学びがあったと考える。

H グループは日本の伝統行事としての節分にちなみ，導入として絵本「泣いた赤鬼」からイメージを持ち，「豆まき」の歌唱教材を用いて表現を工夫する内容であった。このグループには幼児教育選修，書道選修の学生が含まれていたが，絵本の読み聞かせで子どもをひきつけ，節分の行事の説明，各地方の伝統的な慣わしや食べ物の話をし，「豆まき」を範唱しながら子どもと歌う。そこからイメージを広げて，「ぱらぱら…」という擬音語の歌詞の部分を「鬼を追い出したい」気持ちや「福の神にきてほしい」などのイメージに合う楽器で表現したり，動作を考え身体表現してみる。歌うだけではなく楽器や身体による総合的な表現を追求し，グループで自分たちのイメージの表現を発表する流れである。楽器は簡易リズム楽器だけでなく，ペットボトルに豆などを入れた手作りマラカスのような楽器も取り入れ，鬼を追い出す動作で表現していた。このグループの模擬授業では，導入や説明に時間を要したため，グループ内の学生による発表であり他の学生は実際には活動しなかったが，幼少期の遊びから音楽の要素とイメージをつなげる学

習への可能性を示し，幼小連携の視点を学ぶきっかけとなった。

また今回の模擬授業では，主な指導内容における要素として拍子やリズムを扱ったグループが多かったが（A・B・D・I・N・Q・R・U・V），ほとんどのグループが様々な楽曲教材を用いているのに対し，V グループは普段無意識のうちに歌ったり叩いているリズムと「お祭りのかけ声」の言葉を組み合わせ，イメージとともにオリジナルの音楽づくりにつなげていた。提示したリズムカードは 6 種類あり[5]，それらをグループでつなげる。言葉とリンクしているため，子どもたちには非常にわかりやすく，同時にリズム譜に親しむ学習にもなる。またかけ声の言葉だけではなく太鼓など「お祭り」の神輿を担ぐイメージに合う楽器を取り入れてもよい。「お祭り」は子どもたちの生活の中にある経験と結びつき，総合的な学習や生活科の学習などでも扱われ，音楽科とも結びつく合科的な指導の可能性がある。この視点は学生にとってもよい学びとなった。

7. まとめと今後の課題

⑴ 模擬授業の有効性

初等教員養成に必要とされる音楽経験として模擬授業を取り入れた講義を試みた結果，筆者の意図とした音楽科の指導内容や指導法の実践例はおおむね学生に理解されており，指導案の作成から模擬授業の経験を通して様々な学びがあったことからその有効性は明らかとなった。

最初の 10 回の講義では，歌唱の指導と器楽の指導を学年ごとに分けて行い，後に全学年まとめて鑑賞の指導，音楽づくり，総合的な学習を扱ったが，歌唱の指導として扱った学習内容が器楽の指導でも生かされたり，鑑賞と音楽づくりの学習が関連していたり，更に学年を超えても連動させていくことが可能であることを学生はしっかり学び取っていた。対象学年や指導内容の設定には多くの選択肢があるが，一般学生にとっての傾向としては，低学年におけるリズム遊びや言葉の抑揚と身体活動が中心となり，そこから音楽づくりやイメージに合う音探究に展開するものが多かった。事前アンケートで，音楽科の授業のイメージは「合唱や合奏」が主な活動として多かったが，模擬授業を経験することで音楽を特徴づけている要素や楽曲の仕組みなどをとらえるために，子どもが楽しく活動できるための教材の応用力の柔軟さは，筆者が想定していた以上のものが発揮された。

⑵ 新たな可能性

今回の模擬授業を通して学生の選修分野と関連させた指導内容や教材，指導法を展開できる新たな可能性が見出された。学生の模擬授業からも様々なアイディアを得ることができ，レポートの記述からも一般学生が音楽科と自分の分野との共通点や相違点を意識しながら模擬授業を経験

していたことが分かった。今後，音楽科専攻の学生と一般学生の音楽観や授業観の違いにも着目しながら，教材研究を進めていきたい。

⑶　今後の課題

全学年の指導内容を細かく扱うには，時間的にもなかなか均等に配分することが難しい。実際に小学校教諭として勤務する場合，低学年の音楽科の授業を行う可能性はきわめて高いため，幼小連携の視点を含めて低学年の指導により重点をおくべきであろう。特にわらべ歌を扱った授業構成に関しての新しい実践例も参考に教材研究をしていく必要がある。

中学年以上の内容をどの程度扱うかについては調整する必要もあろうが，特に「表現」領域の指導として音の重なりやハーモニーを味わって演奏したり表現の工夫をする音楽づくりの内容は学習要素として欠かせないと思われる。模擬授業にはなかなか反映されなかったが，グループによる様々なアンサンブル体験などを取り入れながら学生が捕らえやすい活動を模索していきたい。

また，今回の筆者の授業で，和楽器の音楽を含めた我が国の伝統的な音楽，郷土の音楽，諸外国に伝わる民謡などについて詳しく提示できなかったことは，課題として残る。これからの学校教育における音楽科の役割の方向性をさぐりつつ，日本の伝統音楽のカリキュラムや指導内容について，初等教員養成においても活用できる内容を検討していきたい。

更に，講義における主な内容は，学習指導要領の各学年の目標と指導内容や指導方法をふまえた実践例を多く経験し，授業づくりの学びに重点を置いたため，評価に関しては不十分と言わざるを得ない。国立教育政策研究所の資料に基づき 4 つの観点「音楽への関心・意欲・態度」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」「鑑賞の能力」を提示したが，詳しい評価方法などまでは至らなかった。指導案を作成する上でも評価規準の設定の難しさを感じる学生が多くいた。実際の模擬授業では，模擬授業そのものを評価する活動を行ったが，現場での音楽科における評価規準は，教師の感性や力量によっても異なるし，子どもの内面における感受を評価することは非常に難しい。ワークシートや発言などの言語活動以外にも外に現れない，いわゆる見えにくい部分をどうするのか，筆者自身もまだ整理できぎらず，研究の余地は残る。また，授業の学習記録やアセスメントシートの記述は評価をする上で参考になるとは思うが，そのために音楽活動をする時間が短くなってしまうのは残念である，との現場からの声も聞く。この点については今後の課題としたい。

最後に，今後更なる教材研究と授業開発を進めるあたり，幼稚園，子ども園，小学校等の現場と連携した実践的研究は不可欠であり，附属校だけでなく様々な学校現場との連携を試みたい。

（尚，本論文は日本学校音楽教育実践学会第 18 回全国大会において自由研究として発表した「初等音楽

科教育法における模擬授業の有効性について～指導案および実践の分析から～」を基に，新しいデータを加え，再度分析・考察してまとめたものである）

《注》

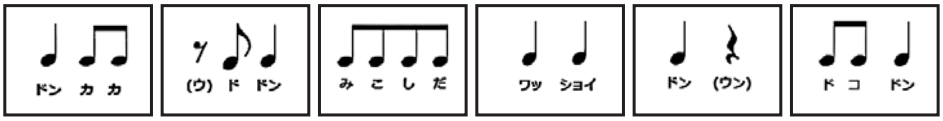
（1） キーワードについては，小学校学習指導要領解説から，指導内容としての音楽を特徴づけている要素や音楽の仕組みに関する用語や視点を置きたい言葉を設定した。

（2） 使用教科書「小学生の音楽 1～6」（教育芸術社），「新しい音楽 1～6」（東京書籍）。DVD 映像は「生成を原理とする 21 世紀音楽カリキュラム」および筆者が撮影した小学校での実践例など。

（3） 選修分野について，情…情報教育　際…国際教育　国…国語教育　英…英語教育　体…体育教育　幼…幼児教育　書…書道教育　心…学校心理　学…学校教育　特…特別支援教育　社…社会教育。

（4） 表 5 における指導内容の領域別分類は，小学校学習指導要領における音楽科の指導内容の領域 A「表現（歌唱・器楽・音楽づくり）」B「鑑賞」と「総合的な学習」の項目に分けた。個々の分類については，鑑賞から表現活動へ展開したり，歌唱と音楽づくりを関連付けたりしているものもあるが，個々の指導案における本時の主な活動展開によって主眼が置かれている領域に分類した。

（5） リズムカード　V グループが提示したリズムカードは次の 6 種類である。



参考文献

文部科学省「小学校学習指導要領解説」音楽編　教育芸術社（2008）

国立教育政策研究所「評価基準の作成，評価方法などの工夫改善のための参考資料（小学校　音楽）」（2011）

初等科音楽教育研究会編「最新　初等科音楽教育法」改訂版　音楽之友社（2011）

小島律子監修「小学校音楽科の学習指導」── 生成の原理による授業デザイン ──　廣済堂あかつき（2009）

日本学校音楽教育実践学会編「生成を原理とする 21 世紀音楽カリキュラム」幼稚園から高等学校まで　東京書籍（2006）

佐野仁美「小学校教員養成課程における授業づくりの学び ── 模擬授業を通して」神戸大学表現文化研究会（2009）

今村方子「子どもの主体性を育む小学校音楽科授業の研究 ── 学生の模擬授業「鑑賞」分析をとおして ──」子ども未来学研究（2006）

田中龍三「音楽科教育法における模擬授業」教科教育学論集（2010）

西園芳信・小島律子「総合的な学習と音楽表現」黎明書房（2000）

島崎篤子「音楽づくりで楽しもう」日本書籍（1993）

（提出日　平成 27 年 9 月 28 日）